

大魔王のお笑い神話



謎の超笑力をもつ大魔王が、あなたに贈る不思議なムダ話

発行：トラベル・ミトラ・ジャパン (E-mail : daimao@travelmitra.jp)

ぼん子画

(570-0041) 大阪市北区天神橋 1-18-25 第3 マツイ・ビル 201 TEL : 06-6354-3011

お笑いエッセイのメール発信をご希望の方は、ご連絡下さい。(E-mail : daimao@travelmitra.jp)

「Very good departure、また会う日まで」①

全く運の悪い離陸 (Departure) になってしまった。

9月3日23時にデリーを出発し、香港に着陸したのは早朝6時であった。強烈な台風21号がじわじわと関空にせまっていた。JAL便など他の航空会社が次々にフライト・キャンセルになるなか、わが英雄的航空会社エアインディアは関空に飛び立つという。

(エアインディアに勝利あれ。ジャイ！)

再び搭乗するが、翼は開かない。そのうち機内食がでてきて食したものの、まだ飛ばない。台風が目が関空を覆った時を見計らって、そこに英雄アルジュナが矢を放つ。そこでわれらのエアインディアは英雄のごとく地上に降り立つ、と想像していた。

結局矢は放たれることなく、われらはホテルに退散することになった。すでに正午過ぎになっていた。

関空は壊滅状態だ。タンカーが連絡橋に衝突している画像がテレビに映し出された。

(こりゃ、ダメだ！)

いくつかの選択肢が示された。沖縄か新千歳空港なら日本に帰れる。急ぐ人は新千歳空港へ向かったようだ。ところが、6日午前3時8分に北海道地震が発生し全道がブラック・アウトになった。もし新千歳空港を選択していたら再び路頭に迷っていたであろう。そのうち鹿児島なら上陸できるかもしれないという情報がもたらされた。

(よっし！それで行こう)

ところが、待てど暮らせど返事が来ない。5日深夜近くに連絡がきた。6日19時香港からバンコクに引き返し、バンコク/成田に着く便が確保できた。7日早朝7時にわれらは成田に着くことができた。

バッド・デパーチャー (Bad Departure) だったが、全員無事帰国できた。オマケで、香港飲茶料理を楽しむことができた。

実はわが輩は4日に帰国、休息して7日に上京する予定であった。東京八重洲での油絵展に出展していたからである。すでにホテルは予約してあった。わが輩にとっては好都合なのだが、とにかく疲れた。機内で風邪の菌をいただいたようで、咳き込んで眠れなかった。

いや、単なる疲れだけではない。香港にいるとき、旧友“おじゃま虫”の訃報が入った。そのダメージもあった。学生時代にわが恋路の邪魔をした奴だ。追試を受けにいくと、必ず奴がいた。名古屋で事業に失敗してから、大嫌いだった大阪にやって来るようになった。わが輩の世界に侵入しまとわりついていた。

まさに“おじゃま虫”である。

わが輩はインドから帰国後“不感症”になり、美術館に行かなくなった。もちろん油絵を描くこともなかった。わが輩は美術研究会に所属し、五名で情念の画家モジリアーニを信奉するグループを結成していた。“おじゃま虫”もメンバーだった。

ところが、数年前“おじゃま虫”は勝手に出展を申し込んでしまった。やむなく出展したが、今では感謝している。わが輩の絵画はどこに飾るか問題になるらしい。両側の作品に迷惑がかかるとのことだ。今回プロ画家がわが輩の作品の前で「メッセージ性とユーモアがある」との批評をくれた。わが輩は上手な絵は描かない。(描けない)プロ画家の真似をして小器用に仕上げるのはプロ画家に失礼というものだ。彼らは全精力をかたむけて描いているからである。

同じように、“おじゃま虫”の絵も下手くそだ。本人も自認している。わが輩は彼に言った。

「あなたの絵は下手にちがいないが、それが個性だ」

その下手くそな作品が届かないというので騒ぎになった。連絡をとったら、彼はすでにこの世にいなかった。

8月21日彼から電話があった。いつも用事がないのに電話してくる。26日わが輩から電話したが不通であった。30日わが輩はインドに出航(Departure)した。彼はすでに23日この世を出立(Departure)していたのである。7日間も発見されることなく風呂の中にいた。

香港のホテルで訃報を知った。涙が止まらなかった。悲しいというのでもなく、残念という気持ちでもない。「みんな消えるのか」という表現が近いかもしれない。

インドに出航する前に、もうひとつ訃報があった。さくらももこさんの死である。これには驚いた。彼女は若い。残念というほかにことばはない。彼女と旅をしたこと(『さるのこしかけ』)が思い出される。さくらさんとの秘話は別稿にゆずるとして、Departureについて語ってみたい。

いや、今こそ語らなければならない。みんな消えるからである。